

## 生殖補助医療テーマ 岡山でシンポ 現行制度の課題など指摘

地域話題 岡山市

シェア ツイート

第三者の精子や卵子を用いた生殖補助医療をテーマにしたシンポジウム（岡山大主催）が6日、同大鹿田キャンパス（岡山市北区鹿田町）で開かれた。日本G I（性別不合）学会理事長の中塚幹也・同大教授らが登壇し、LGBTQ（性的少数者）当事者の思いが十分に反映されていない現行制度の課題などを指摘した。



生殖補助医療について中塚教授（左端）らが話したシンポジウム

中塚教授は、当事者に子どもを持つ意識を尋ねた2017年の調査を紹介。女性として生まれたトランスジェンダー男性の7割が、第三者から提供された精子を使った女性パートナーへの人工授精について「実際に行った」か「行いたい」と答えたという。

穴戸圭介教授（医事法学）は、生殖補助医療で生まれた子どもの親子関係を明確にする民法の特例法（20年成立）について「対象が不妊治療に限定されている」とし、子どもを望む同性カップルらが言及されていない問題点があるとした。

生殖補助医療を行う「はらメディカルクリニック」（東京）臨床心理士の戸田さやかさんは、第三者の精子で誕生したカップルの子どもに対して「両親にとってかけがえのない存在であるという点と、精子の提供で生まれたという事実を伝えることが大切」と話した。

医療従事者ら約60人が聞いた。

（2024年07月06日 20時34分 更新）